



TITLE:

アレントの悲劇的政治観(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

和田, 隆之介

CITATION:

和田, 隆之介. アレントの悲劇的政治観. 京都大学, 2015, 博士(法学)

ISSUE DATE:

2015-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k18750>

RIGHT:

(続紙 1)

京都大学	博士（法学）	氏名	和田隆之介
論文題目	アレントの悲劇的政治観		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、近代以降の世界における生の実在性の喪失をいかに克服するかという実存哲学的問題、および予測不能な政治という営みが内包する悲劇性にいかに対処するかという政治理論的問題を解明するべく、ハンナ・アレントの政治思想を「悲劇的政治観」という視座から検討するものであり、アレントの「悲劇的政治観」を出生概念およびポリス論から析出する第一編と、その思想的淵源をアレントのアウグスティヌス解釈のなかに跡付ける第二編と、その展開をマルクスやハイデガーの批判的解釈を通じて検証する第三編から構成されている。</p> <p>第一編第一章「アレントにおける悲劇的政治」では、従来実践的政治空間の創設という観点から評価されてきたアレントのアメリカ独立革命論が、むしろ創設の挫折という「悲劇」の視点から解釈されるべきことが論じられる。すなわちアレントは、出生という始まり（アルケー）に由来する人間の自由が、革命を可能にするとともに、その失敗を運命づけるという両義性を孕んでいることに着目していたのであり、挫折という悲劇的体験を記憶のなかに保持し、新たな可能性として後続世代に引き継ぐことの重要性を指摘したのである。</p> <p>第一編第二章「可能性としてのポリス」では、こうした「悲劇的政治」概念が、『人間の条件』における古代ギリシアのポリス解釈にも一貫していることが論じられる。すなわちアレントは、過去の行為が現在の行為の可能性の条件をなす、という権力の通時的構造が、自由な市民が生の実在性を獲得するポリスを成立させると捉えていたのであり、これはまた、アレントが参照する J-P・ヴェルナンやハイデガーのポリス論にも共通する理解なのである。</p> <p>第二編第一章「始まりとしての「見いだし」」では、第一編で析出されたアレントの「悲劇的政治」概念が、学位論文以来のアウグスティヌス解釈においても一貫して認められることが論じられる。すなわちアレントは、世界における物の「使用」と「享受」の両義性から自己の起源の「見いだし」に向かうことを説くアウグスティヌスのキリスト教哲学を、悲劇的世界を生きる人間の有限性の「見いだし」という観点から独自に解釈し、さらにキリスト教の隣人愛概念を、世界を共に生きる具体的な他者に対する愛として位置づけ直し、世界の悲劇性と人間が和解可能なことを示したのである。</p> <p>第二編第二章「記憶を用いる意志——意志概念の二重性」では、同じ問題が、晩年のアレントの意志論では「記憶を用いる意志」として再検討されていることが論じられる。すなわちアレントは、パウロやアウグスティヌスが着目した人間の内なる意志の葛藤が、恩寵による救済（パウロ）や来世での享受（アウグスティヌス）ではなく、記憶の使用によって意志が愛へと変形され、かつ世界への活動をつうじて緩和さ</p>			

れると解釈したのであり、それにより世界の悲劇性を見据えつつ世界を愛するという人間の両義的性格を示したのである。

第三編第一章「アレントのマルクス批判」では、アレントが、マルクスの労働力概念を批判的に検討することを通じて、権力の悲劇的両義性を明らかにしたことが論じられる。すなわちアレントは、マルクスが言うように潜在力としての権力が人間の生命力の発現と一体のものであり、しかし、それゆえにこそ共同体の成立を可能にするのみならずそれを破壊する可能性を秘めているという危険性を示したのである。

第三編第二章「見えないものの「使用」——古代と近代」では、アレントがアウグスティヌス解釈で重視していた「使用」の概念が、古代のポリスにおける言語の「使用」という視座から捉え直され、近代的な代議制をめぐるメルロ＝ポンティの思想との共通性が論じられる。すなわちアレントは、言語と記憶の使用により不在のものを思考する人間の能力が、（第一編第二章で論じられたような）権力の通時的構造を支えていることを明らかにしたのである。

第三編第三章「アレントとハイデガーのアナクシマンドロス解釈」では、アレントが、ハイデガーのアナクシマンドロス論に、存在と存在物の差異という従来のハイデガーの思想とは異質な、生成の原理を不在のものの思考と結びつけるという自らの思想と共通する契機を見出していたことが論じられる。すなわちアレントは、ハイデガーが示唆する生成と存在の差異を把握しつつ不在のものを再現前化する思考を、過去と未来の間で自由の可能性を思考することで悲劇的世界との和解をはかるという観点から解釈したのである。以上から、アレントの「悲劇的政治観」は、世界のなかで人間が行なう行為は誤りを逃れないという悲劇的性格と対峙しつつ、思考や意志という精神的作用を通じて、かかる悲劇的性格と和解を目指すことを要諦とするものである、と結論づけられる。

(続紙 2)

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、現代政治思想に大きな影響を与えながら、その思想内容をめぐって未だに議論の絶えないハンナ・アレントの政治思想を、「悲劇的政治観」という独自の視座から解明することを試みた労作である。

本論文の第一の意義は、最初期の学位論文から最晩年の遺稿にいたるまで、半世紀におよぶアレントの思想の歩みを一貫した探究過程として捉え、従来の研究では軽視されがちであった哲学や神学にかかわる論考も細かく検討しながら、アレントの政治思想の要諦は、従来の研究において重視されてきた「活動」「現われの自由」「公的領域」といった実践的政治概念ではなく、むしろ自由な実践がもたらす受苦や困難という悲劇的な事態を抑制・受容するという精神的作用の考察に存する、という独自のアレント解釈を提示した点にある。その独自の解釈を検証すべく、E・ユーベンやP・マルケル等による最新のアレント研究の成果を積極的に取り入れながら、アレントの思想に決定的な影響を与えたM・ハイデガーはむろん、J-P・ヴェルナンやメルロ＝ポンティといったアレントが参照している思想家のテキストを渉猟し、詳細な検討を加えている点も、政治思想史研究として高く評価できる。

「悲劇的政治観」という斬新なアレント解釈を提示する本論文は、アレントを公共的な熟議実践あるいは差異をめぐる自由な闘技といったポジティブな政治観を提示した思想家として、ともすれば安易に現代デモクラシー論に結びつける傾向のある今日のアレント研究に対して、政治という営みが根源的に孕む危険性を考究した思想家という新たなアレント像を打ち出しており、今後のアレント研究ならびに現代政治思想研究の発展に重要な貢献を成す可能性をもつ、優れた内容を有していると評価できる。

もっとも、本論文にも問題がないわけではない。「悲劇的政治観」の一貫性を論証しようとするあまり、アレントの著作について恣意的と受け取られかねない解釈が見られ、時系列に沿った思想形成過程の検証が軽視されているきらいもある。また、アレントと他の思想家を比較する際に、推測に頼った強引な解釈も見られる。加えて、規範的政治理論への貢献という観点からは、本論文の提示する「悲劇的政治観」が現代の政治概念に対してどのような視座や論点を提供するものであるのかが十分に明示されているとは言えず、改善を要すると思われる。

とはいえ、これらの問題点は、必ずしも著者の責めに帰すべきものではなく、上で述べたように、アレント研究が内包する論点と射程の大きさに多分に由来するものであり、本論文の価値を損なうものではない。

以上の理由から、本論文は博士（法学）の学位を授与するに相応しいものと認められる。

また、平成27年2月3日に調査委員3名が論文内容とそれに関連した試問を行った結果合格と認めた。